

落椿さゝへもたげて芝は伸び

昭和一五

いちくくに心ありげの落椿

同一六

公園の掃除夫が掃く落椿

同

白椿葉かぶさりて隠れ貌

同

この道の必ずこゝに落椿

同一七

玉椿たまく二輪相擁し

同一八

枯蔓をいかに脱がんと椿かな

同一九

藪垣に結ひこめられて花椿

同

花と葉と相搏つ風の椿かな

同

落椿道の真中に走り出し

同

落椿即ち紅の地に印す

同

莖立 日の色は黄色に赤や莖立てる

同一七

大小の畑のもの皆莖立てる

同

葦 葦切るやともし火をとる窓の人

明治三八

接木

狭き庭に接木などして暮しけり

明治三〇

造花已に忙を極めたるに接木かな

大正四

接木の上大いなる鴉とびにけり

同

接木參差として住める隣あり

同

大いなる臺木に小さき接穂かな

同

潮の音桑畑に満ちて接木かな

同

接木すや裏戸覗きをる人賤し

同

慌し豆は蔓延び接木つく

同

雲静かに影落とし過ぎし接木かな

同

門内にすぐ接木ある園生かな

大正一二

木深くも接木してゐる主かな

昭和二

梨棚の下なる梨の接木かな

同七

やれ寺に人住んでをる接木かな

同九

挿木

さし木して我に後なき思ひかな

明治三八

一枝の葉の凜として挿木かな 昭和二二

目出度さや老の挿木のよくつきて 同二三

行く水の囁き流れ挿木つく 同二七

流れゆく月日の下の挿木かな 同

垣繕ふ 袖垣の竹青々とつくろひぬ 同九

今年又残りの垣を繕ひぬ 同二四

飼犬を叱りて垣を繕ひぬ 同二五

主なき家ながら垣繕へり 同

繕ひし垣根めぐらし隠れ栖む 同

人住めり垣を繕ふこともせず 同二八

屋根替 屋根替のひとり淋しや頬かむり 同七

屋根替も出来ず朽ちたる寄進札 同八

屋根替の埃の上の晝の月 同九

屋根替の萱の穂綿のとぶことよ 同

僧交り屋根替の萱運びをり 昭和一三

屋根替の繩切れ長く垂れてをり 同一五

古萱も少しはまぜて屋根を葺く 同

卒業の眉打ち上げて来りたり 同八

一を知つて二を知らぬなり卒業す 同一〇

卒業の娘の人と成るばかりなり 同

卒業をしてすぐに来る別離あり 同

春の野

運命は笑ひ待ちをり卒業す 同一四

音高き春の野水に歩をとゞめ 同二〇

霞 肥舟のかすんでのぼる隅田川 明治二七

干綱に漕ひく背戸の霞かな 同二九

高閣に坐せば流るゝ霞かな 同

松の間に小さき城の霞かな 同

一齊に撞き出す鐘の霞みけり 同

來し方も行く手も霞む野中かな 明治三〇

海荒れてわたれぬ佐渡の霞かな 同三七

五層樓霞の上の君子かな 同三九

須磨の海霞んで見えぬ朝かな 大正一一

四山皆霞める中の小橋かな 同一四

晝霞かゝりそめけり暫しほど 同

いつの間に霞みそめけん立ちて見る 同 一五

一人づゝ渡舟を下りる霞かな 昭和五

四ツ手揚げて晝餉にかへる霞かな 同 八

干物はいつも赤しや遠霞 同 九

巴里

霞む日や破壊半ばのトロカデロ 同 一一

夕霞木々柔かになりけり 同 一三

霞みつゝ富士刻々に色變り 同 一四

鈍子にてあふひ逝去の電報を受取る

目の前の浪に霞みておはすらん

昭和一四

富士つひに霞んで見えなりにけり

同一五

物皆の霞濃くなりまさりつゝ

同

霞む野に隠れ住むとにあらねども

同一六

石上も冷たからずよ春霞

同一七

荷を負ひて即ち霞み行きにけり

同一九

陽炎

陽炎が何やらものになりさうな

明治二九

紅縁子の笠に題す

陽炎がかたまりかけてこんなもの

同

神仙體

羽衣の陽炎になつてしまひけり

同

陽炎や落花の雨の乾く縁

同三五

陽炎や蓆の上の笛太鼓

同

陽炎に鶏を追ふ小犬かな  
明治三五

陽炎や藁屋も道も榛の影  
大正一一

陽炎に包まれ遊ぶ子供かな  
同一四

陽炎の我をつゝめる如くなり  
同

陽炎の石を佛と拜みけり  
昭和一四

道ばたの杭細りつゝ陽炎へり  
同一五

何ゆゑに其處が陽炎ふ大地かな  
同

踏青

陽炎や目も鼻もなき石佛  
同一六

葛城の神巒はせ青き踏む  
大正六

うち笑める老を助けて青き踏む  
昭和二

日を仰ぎ水に邊りし青き踏む  
同

踏青や古き石階あるばかり  
同

キューガーデン吟行

真直ぐに歩調そろへて青き踏む  
同一

踏青の人にめぐれる野水かな 昭和一九

手を拍つて三人笑ふ青き踏む 同

野遊

野遊やうその古蹟にうめ一木 明治三七

わが爲めに皆野に遊ぶ乳母が宿 同

野遊びの草臥足を道後の湯 同

摘草

摘草に裏戸を出で、つれ立ちぬ 同三二

草摘みし今日の野いたみ夜雨来る 大正二

摘草をすれば必ず来るところ 同三

摘草の膝に顔のせ婦かな 同四

寒き日を草摘に出し嬌かな 同

草を摘む子の野を渡る巨人かな 同

草摘に出し萬葉の男かな 同

彼の丘に草摘む彼女尙ありや 昭和一〇

點のごと鷹舞ひ澄むや草を摘む 同四



日輪の低く親しや草を摘む 昭和一四

土手の上に顔出し話す草を摘む 同

機下りて草摘みに出る婦かな 同 一五

摘草を顔膝にのせ選りわくる 同

摘草の母を迎ひの子は跣足 同 一六

風吹いて摘草の人居ずなりぬ 同

烏さへしたしまれつゝ草を摘む 同

ひたすらに餘念も無しに草を摘む 同

摘草の一かたまりに居るが見え 同 一七

よき籠を提げ摘草に出るところ 同 一八

蓬 道の上しをれし蓬こぼれつぐ 同 三

焼け葎めぐりもえたる蓬かな 同 七

籠の中に減りて萎れし蓬かな 同 八

籠あけて蓬にまじる塵を選る 同

畦傳ひ摘み進みたる蓬かな 昭和一六

眞つ赤なる娘の遠くゐる蓬摘 同

母子草 老いて尙なつかしき名の母子草 同一九

土筆 行平に土筆煮え居る母の居間 同七

妹よ來よこゝの土筆は摘まで置く 同一二

蕨 草の戸た蕨もえけり二三本 明治二九

旅にして越ゆる山路の蕨かな 同三〇

早蕨を誰がもたらせし厨かな 大正二三

山里の物辛く煮し蕨かな 同

柚の荷にかならず蕨つけてあり 昭和七

雲水の連立ち出るや蕨採り 同八

舟に乗つて向うの山に蕨採り 同

奉天週歩邸

箸を先づ蕨につけてリラの卓 同一六

芹

洗ひ上げて策にすくなき根芹かな 明治三三

206

装ひて來る村、嬢や芹の水 昭和二

此の水の淺くなり行く芹田かな 同四

泥落ちてとけつゝ沈む芹の水 同

落ち込んで鼠の逃ぐる芹の水 同七

我影の映りて淺し芹の水 同八

もたげ張る氷の下の芹の水 同九

防風

神垣や清淨にして芹の水 同二

鶏にやる田芹摘みにと來し我ぞ 同二〇

風強し防風摘まんと濱に出る 同二八

砂濱を斯く行く防風摘みながら 同

防風摘む波のさゝやき聞きながら 同

松山在風早西ノ下に遊ぶ

末子先づ防風見つけてうれしけれ 同

207

ふるさとに防風摘みにと來し吾ぞ

昭和一八

神仙體

董

その中にちいさき神や壺すみれ

明治二九

塊に董さきたり 歎の上

同三一

つちくれの小さき日蔭に董かな

同三九

古寺一や董花 咲く苔の中

昭和九

鉛筆で仰向け見たり 壺董

同二

蒲公英

蒲公英に春光蒸すが如きかな

明治三五

蒲公英に繫がぬ馬のたづなかな

同

蒲公英のほうけて飛ぶを追ふ雀

昭和六

風吹いて蒲公英花をとざしけり

同八

遠方のたんぼの黄の大いさよ

同一五

人々は皆芝に腰たんぼの黄

同一七

たんぼの黄が目に残り障子に黄

同

空の藍地の一點のたんぼ、黄  
昭和一七

紫雲英  
秋篠はげんげの畦に佛かな、同一〇

薬蕪  
はこべらの石を包みて盛り上る  
同六

薺の花  
なつかしき道選り歩く花薺  
同九

茅花  
富士見茶屋馬茅花食むけしきかな  
明治二九

母いでて我よぶ見ゆる茅花つむ  
同三八

春蘭  
春蘭を松の葉越しの日に掘りぬ  
昭和一八

春蘭を掘り提げもちて高嶺の日  
同

利茶  
茶を嗅ぐや耳に黄鐘調をなす  
明治三五

四月

彌生

布團うりて淋しき彌生半ばかな

明治二八

降りつゞく彌生半となりにけり

同

春日

薄絹の几帳に春の夕日かな

同

金屏にさしこむ春の夕日かな

同二九

深潭に春日透りて魚もあらず  
明治二九

神仙體

神の子の舞ひく春の入日かな  
同

草の上に物影濡れて春日かな  
大正二

静かなる今日の今あり春日影  
同三

桂出て尙餘りある春日かな  
昭和四

夕暮の雲にたゆたふ春日かな  
同八

茶屋女出づればあびる春日影  
同九

眼つぶれば春日險にかよへり  
同

コルシカに春日赤く今沈む  
同二

竹林に黄なる春日を仰ぎけり  
同三

彼の女春日まぶしく瞬けり  
同

春日の今此時を楽しまん  
同四

春日の日の静にさせる漢の瓦壺  
同五

春の日を仰ぎ昔の事思ふ 昭和一五

春の日や大木の影地に薄く 同一七

動き行く女人群像春日影 同一八

日永 鶏の築地をくづす日永かな 明治二七

永き日を足弱つれて大和路や 同二八

川に添ふ一筋町の日永かな 同

藍流し 村の日永かな 同

山寺に線香もゆる日永かな 同

大船の尻振りかはる日永かな 同

古白一周忌

永き日を君あくびでもしてゐるか 同

宮島二句

踏めばゆらぐ一枚石の日永かな 同

永き日を鳥井くゞりて遊びけり 同



永き日の尺を織りたる錦かな  
明治三〇

218

永き日を遠巻きにする軍さかな  
同

永き日を船牢に硫黄が島近み  
同

この谷の遅日におはす庵主かな  
大正二

斯の如く日永人なる夫婦かな  
同

遅き日を俄に亂す用事かな  
同

松の間の大念佛や暮遅き  
同一三

龍安寺

この庭の遅日の石のいつまでも  
昭和二

永き日や汀の菖蒲水を出し  
同

暮遅し人ちらばりて相寄らず  
同

山門の半ば見えぬ遅日かな  
同四

修學出て桂に廻る日永かな  
同

鯉の麩を投げてしまひて日永人  
同六

219

永き日や法華太鼓も今は止む 昭和九

遅き日の刻を惜みて園にあり 同一〇

獨・蘭國境

國境の驛の兩替遅日かな 同一一

永き日を船渠見終り寮舎見る 同一八

永き日や昔初瀬の堂籠り 同

春の空 雨晴れておほどかなるや春の空 同一二

大屋根に春空青くそひ下る 同一三

いつくしむごと覆ほへり春の空 同一六

春の空遊べる子等を覆ほへり 同

瑠璃たゝみ珊瑚鏤め春の空 同

鳶高く鴉低しや春の空 同一七

鷗の目鋭きかなや春の空 同一九

春の雲 舩に身をもたせ居り春の雲 大正一五

春の雲の大塊の下小村あり 昭和一一

寶石の大塊のごと春の雲 同

日を追ふてく春の雲消ゆる 同一四

そこを行く春の雲あり手を上げぬ 同

春雲は棚曳き機婦は織り止めず 同

旗西になびき東に春の雲 同

思ふことなければ春の雲を見る 同

渦潮に日影つくりぬ春の雲 同一五

おほどかに日を遮りぬ春の雲 同

一塊の春の雲とけ行くまゝに 同一七

日を包むまゝ移り行く春の雲 同一八

飴の如延び擴がりし春の雲 同

クレエンの動き止まずに春の雲 同

蓼科に春の雲今動きをり 昭和二〇

麗か 五歩に亭十歩にベンチ人うらら 同九

麗かにふるさと人と打ちまじり 同二八

長閑 浪荒るゝ日ものどかなり松の宿 大正二一

山寺の古文書も無く長閑なり 昭和七

日かげるも照るも長閑やそゞろ行く 同二三

ついて来る人を感じて長閑なり 同二四

初櫻 徐ろに眼を移しつゝ初櫻 同二〇

入學 とつぐ娘に末の弟の入學す 同八

入學の子の顔頓に大人びし 同二六

出代 出代の姉妹馬に乗つて行く 明治二九

出代のおとなしくして哀れなり 同三〇

出代の葛籠背負うて来りけり 同

出代の更に醜きが来りけり 同

神代より出代もなく目出度けれ 明治三一

出代の醜き女それもよし 昭和八

寒食や竈の中の薪二本 明治三一

寒食や壺の底なるしゝびしほ 同

山葵 ほろくゝと泣き合ふ尼や山葵漬 同三七

草餅 草餅や出流れの茶をあたゝめて 同

庖厨に草餅あり京に移住の議 大正二

本尊にと持たせよこしぬ草の餅 同七

草餅の黄粉落せし胸のへん 昭和八

草餅や古新聞をひろひ讀む 同

草餅を焼けば黄粉の落ちて燃ゆ 同

草餅をつまみ江山遙なり 同一四

鄙びたる蓬餅なり嬉しけれ 同一五

掌にうけて柔か草の餅 昭和一六

雨の日のよき土産なり草の餅 同一九

櫻餅 三つ食べば葉三片や櫻餅 明治三七

灯火の下に土産や櫻餅 同三九

二代目のお六はありや櫻餅 同

ともし火にほの赤きこの櫻餅 大正一四

半日を提げし土産のさくらもち 昭和五

電燈を下げて土産のさくらもち 同七

櫻餅と音樂會の切符かな 同八

櫻餅買うて竹屋の渡舟無し 同

御佛にこれも供へぬさくらもち 同九

病よし主の土産のさくらもち 同

櫻餅の皿廻り來ぬ廻しけり 同一二

上海に來て月酒家の櫻餅 同

船客に雛の日とて櫻餅 昭和一一

櫻餅女の會はつゝましく 同一五

分菊本より花三升さま櫻餅 同

縁側に坐れる客に櫻餅 同

さくらもち一つ減りしは我が食うべ 同

櫻餅籠無造作に新しき 同

東踊 遅き妓は東をどりの出番とや 同一〇

誘はれて東踊の切符あり 同一四

札くれし東踊を見に來たり 同一六

木人の誘ふまゝに

蘆邊踊 誘ひたる蘆邊踊に誘はるゝ 同四

都踊 鉦チヨキく都踊は今なかば 同一四

種痘 種痘する村のいつもの老醫かな 同九

種痘する晝の灯の手くらがり 同

桃の花

山里や薪割る庭の桃の花

明治二七

桃さいてもものぞ床しききなこ飯

同二八

温泉の宿や表も裏も桃の花

同二九

宮島紅葉谷

部屋に沿ふて船浮めけり桃の花

同

音戸瀬戸

瀬戸を擁く陸と島との桃二本

同

神仙體

温泉のいづる岩なめらかに桃の花

同

砂原に桃植ゑし濱の社かな

同三〇

古き桃を棄てゝ新しき桃を挿む

同

桃赤し飯豊の雪を遠目なる

同三八

縁に薄き町の埃や桃の宿

大正八

桃の戸の鈴おもしろや鳴り響く

同



桃生けぬ籬の間にはあらねども 大正二一

老婆子の船を上りて桃の里 昭和八

南支那海航行

卓上の桃あわて咲き葉を出しぬ 同二一

山莊や道をへだて、桃林 同二四

手拭をかぶりて主婦や桃の家 同二〇

杖ついて野徑三步に桃を得し 同

山路の岐るゝところ桃の家 同

梨花 大いなる月の暈あり梨花の花 明治三七

家つゝむ夕餉のけむり梨花の花 同

キューガーデン吟行

立ち寄りて學名を讀む梨花の花 昭和一一

兩岸の梨花にラインの渡し舟 同

梨花村の直ぐ上にあり雪の山 同

舟橋を渡れば梨花のヨブレンツ

昭和一一

李の花

咲きすてし片山里の李かな

明治二七

倫敦郊外

林檎の花

花林檎村を圍みて山かけて

昭和一一

面つゝむ津輕をとめや花林檎

同一二

沈丁花

沈丁花春の月夜となりにけり

明治三三

いたゞきを蜘蛛がいたためぬ沈丁花

大正一〇

沈丁に帚さはりて匂ひけり

昭和六

一もとの沈丁の香の宮居かな

同一六

沈丁の香に酔ひ掛くる蜘蛛の絲

同

沈丁の香に隠れ住む心かな

同

物狂ひとは沈丁の虻のこと

同一八

娘の部屋を假の書齋や沈丁花

同一九

うは風の沈丁の香の住居かな

同

辛夷

立ちならぶ辛夷の苔行く如し

昭和八

晝月をかくす雲行く花辛夷

同

野路遙か白き辛夷を行手かな

同一三

風吹けば躍り騒立つ辛夷かな

同一四

木蓮

大空に木蓮の花のゆらぐかな

明治三九

木蓮に二匹とまれる鳥かな

同

木蓮を折りかつぎ来る山がへり

昭和二〇

連翹

連翹に見えて居るなり隠れんぼ

明治三九

連翹や馬が食み推す秣桶

同

山居杉に親しめば連翹野に戀し

大正二

連翹の大たわみなる一枝かな

昭和七

連翹の一枝圓を描きたり

同一七

檀子の花

松の根にしどみ花咲く山路かな

同一七

松に手をしどみ掘る人見てゐたり

同

もの戀ししどみの花を踏みて立つ 昭和九

あやまつてしどみの花を踏むまじく 同一七

行き過ぎて顧みすれば花しどみ 同一八

嘗て見ししどみを見んと茲に來し 同

木瓜の花

木瓜咲いて薬いやがる女かな 明治二八

木瓜咲くや糟糠の妻病んで薬を煮る 同二九

膚ぬいで髪すく庭や木瓜の花 同三五

裏山の木瓜掘つて來てまだ植ゑず 昭和四

木瓜一むらもつれあひつゝ傾ける 同

木瓜の木に苔あり梅の木に似たり 同六

疊替もしてあり木瓜も生けてあり 同七

土近くまでひしくと木瓜の花 同一〇

木瓜咲きて我庭ながら景色かな 同一四

細き幹傳ひ流るゝ木瓜の雨 同

黄いろなる眞赤なるこの木瓜の雨 昭和一四

木瓜の雨又降り來り美しき 同

幹傳ひ流るゝ木瓜の雨を見る 同一六

木瓜の色褪せよくと雨の降る 同

春曉 名所かな春の曙笠を著て 明治二九

大鳥居春の曙に立つを見る 大正二

杉大樹春の曙に立てりけり 同

大空や春の曙おほどかに 同一〇

曉の春の御あかし消ゆるまゝ 同一一

ハイデルベルヒ

春曉の古城に對しホテルかな 昭和一一

香港の春曉の船皆動く 同

犬吠の春曉の荒るゝこと 同一四

春曉やまことに玉の玉椿 同

春晝

春晝やせわしき中を卓に肱

昭和一三

春晝や廊下に暗き大鏡

同一五

春の暮

春の夕くれんとしては小雨ふる

明治二七

金殿に灯す春の夕かな

同

機下りて灯ともす春の夕かな

同三五

春の人暮るゝを知らず庭に在り

大正四

和蘭の春の夕焼美しき

昭和一一

草臥も快かりき春の夕

同一三

風早西ノ下、舊居のあと

こゝに又住まばやと思ふ春の暮

同一五

春の宵

高閣に灯をともしけり宵の春

明治二九

閨の内に舞の扇や宵の春

同三〇

清水を戻る祇園や春の宵

同三五

灯ともしに門の行燈や春の宵

同

僧一人交りて春の宵集ひ 大正二

嫉妬とは美しき妻の宵の春 同三

春宵や柱のかけの少納言 同四

灯の影の漸く生る春の宵 同

春宵のまとゐに若き我なりし 昭和四

目つむれば若き我あり春の宵 同

靴結びつゝ惜別や宵の春 同九

妓の口の煙草の煙春の宵 同一〇

春宵をあだに過ぎなば悔あらん 同二三

春宵の灯ともすまでの暫しかな 同二四

春宵の此一刻を惜むべし 同二五

料亭のくらき灯や春の宵 同二八

春の夜や見ぬ戀つくる哥の主 明治二七

春の夜の金屏くらし大廣間 同

春の夜の金屏に鴛鴦のつがひかな  
明治二八

春の夜や神すゞしめの鈴の音  
同

春の夜を幼きものと遊びけり  
同三一

春の夜や机の上の肱まくら  
同三三

春の夜の現ともなく坐りけり  
同

春の夜や昔はありし方違へ  
同三七

物に倦みて灯に向ふ顔や夜半の春  
大正二

春燈

春の夜を更かし歸りてさす戸かな  
同

よき調度枕上になり夜半の春  
同

春の夜のまとゐに若き我子かな  
同七

春の夜のいちご目出度し牛乳かけん  
同八

春の灯をおつかぶさりてともしけり  
同一一

廊下なる春の灯火皆つきぬ  
同

春灯の下に我あり汝あり  
昭和五



人顔のあらはれかくれ春燈 昭和九

春燈鏡の中の春燈 同一

春燈を明しとも又暗しとも 同一四

茶房暗し春燈は皆隠しあり 同

春燈の最も大いなる一つあり 同

裸火の春の燈ははしたなし 同一五

春の燈の足許照らし導けり 同

椎花令嬢結婚祝ひ

春燈の下にえにしの絲綾に 同一六

春燈の其一々の静さよ 同一七

春燈の天井すこしくすぼりし 同

春の月 人のすむ明石の城や春の月 明治二九

細々と濱名の橋や春の月 同

淺茅生に小さき春の月出たり 同

面白い話の中へ春の月 明治二九

春月の出たとも知らず東山 同

晝のやうな竹四五本の春の月 同

辨天の琵琶が鳴るなり春の月 同

品川の泥の干潟や春の月 同三〇

春月や灯し登る金閣寺 同

平らなる一枚岩や春の月 同

春月に網うち下る小舟かな 同三七

土佐繪波たゝむ渚や春の月 同三九

春月に人送り出る行燈かな 同

春月や棚なし小舟ならべ漕ぐ 同

高浪の上に描くや春の月 同

庭暮れて春の月ある空廣し 大正二

春月や鏡の如く露廣葉 同六

春月や南下りに東山 大正一一

春の月蛤買うて仰ぎけり 同一五

英國のハーウツチ港に赴く二句

春の月かゝりて船路静なり 昭和一一

三人の旅の親子に春の月 同

この船に伴ひて行く春の月 同

我が宿は巴里外れの春の月 同

朧月

手を上げて別るゝ時の春の月 同一三

白妙の春の月ある空紫紺 同一七

朧月千賀の鹽竈荒れにけり 明治二七

峨々として鬼すむ山の朧月 同二九

河童身を投げて沈みもやらず朧月 同

海に入て生れ更らう朧月 同

朧月出てをり部屋の三味は止み 昭和一〇

船の出るまで花隈の朧月 昭和一〇

くもりたる古鏡の如し朧月 同一四

川ぞひのどの宿とらん朧月 同一八

神仙體二句

朧 夜や空に消行く鞭の音 明治二九

怒濤岩を噛む我を神かと朧の夜 同

朧夜や錨をあぐる餘所の船 同三七

朧夜や東上りに都の灯 同

朧夜や裏町にある小料理屋 同

朧夜の石敷きつめし狭斜の地 大正一一

朧夜の伊達にもしぬ小提灯 昭和八

朧夜や男女行きかひく 同二三

犬吠の今宵の朧待つとせん 同一四

大岩をしばし隠して波おぼろ 同

伏して思ふ朧々の昔かな 昭和一五

見送りし朧々の後ろ影 同一八

朧とはけふの隅田の月のこと 同

朧なる夜を警めの手提燈 同

二人連れ三人連れの朧かな 同

句作もし浮世咄もして朧 同

龜鳴く 龜なくや皆愚なる村のもの 明治三二

蝌蚪 棒切れをつゝめる垢や蝌蚪の水 大正六

土の上に蛙子はねて子遠し 同七

花生けの花菜すてけり蝌蚪の水 同一一

蝌蚪の水漸く浅く芹の花 同

蝌蚪の水動きしづまる時も無し 同

天日のうつりて暗し蝌蚪の水 同一三

やゝ寒く静かにありぬ蝌蚪の水 同一四

池尻やこゝに始まる蝌蚪の水 大正一四

兩の掌にすくひてこぼす蝌蚪の水 昭和 三

蛙の子飛んであちら向きこちら向き 同 七

蝌蚪生れ天日之を覆ほへり 同 一五

蝌蚪生れ落花暫く之を閉づ 同

蝌蚪になるもの育ちをり青みどろ 同 一七

生を享け蝌蚪となりつゝ泳ぎをり 同

柳

堀切や船に飯焚く柳かけ 明治二八

題 紅緑の木魚

柳緑花紅木を削つて魚と爲す 同 二九

寄 紫明樓主人

二條通り柳植うべし君が門に 同

温泉の前に大なる柳枝垂れたり 同

馬上柳を潜つて門に入る日かな 同 三〇

敵城の雨静かなる柳かな  
明治三〇

金殿の扉に雨の柳かな  
同

柳の根にくゝりつけたる祠かな  
同

青柳や人出づべくとして門の内  
同

母を馬に史家村を出る柳かな  
同

魚臭き市場の雨の柳かな  
同

亂調

柳に荷物を掛けて入江の白帆  
同

遠のけば柳ばかりの小村かな  
同三一

門前の春色已に柳かな  
同三四

山寨をなびさかくせる柳かな  
同三九

故郷の柳がもとに在る心  
大正二

楊柳村水縦横人は生活に  
同

舟岸につけば柳に星一つ  
同

柳暮れて人船に乗る別離かな 大正二

青柳に車の轆車宿 同一

青柳の絲の長さをかゝげ見し 同

皿運ぶ窓のボーイに柳吹く 同

夕波の蒸汽著きたる柳かな 同一二

忽ちに馬車溜りけり柳蔭 昭和四

楊柳の道廣うして土橋かな 同

馬車馬の頬を相寄する柳蔭 同

行人に柳芽を吹く門邊かな 同七

芽を吹きて柳もつるゝこと多し 同

土ふめば動く池邊の柳かな 同

だんくになびく堀端柳かな 同

縮ねある柳其まゝ芽を吹きぬ 同

京人や柳櫻の堤行く 同



吹きかへし幹にまきつく柳かな 昭和八

枝垂れたる柳の絲を肩の上に 同二

銀座街頭柳の下の柵に肱 同

水くねり流るゝ邑や柳かけ 同二六

吹き靡く柳の絲の空に消え 同二八

吹き靡きつゝとゞまりし柳かな 同

一様に岸邊の柳吹き靡き 同

花

更けゆくや花に降りこむ雨の音 明治二六

京女花に狂はぬ罪深し 同

花吹雪狂女の袖に亂れけり 同

花の雲ふし拜み行く社かな 同二七

蓑かけて旅をし思ふ花に病む 同二八

千木見えて花に埋もる社かな 同二九

弦音や花に鯛買ふ裏の門 同

花に高尾八文字ふめ伽羅の下駄 明治二九

山門も伽藍も花の雲の上 同

花に豆腐味噌買ふことを忘れ男 同

女等のぬれて戻りぬ花の雨 同

飴賣に人たかりけり花の下 同

古白子自ら刃を加ふるの前数日、朝來氣分悪しとて書端に

花のころ西行もせぬ朝寝かな

とあり

落花叩けどもく未だおき出でず 同

硯の水の落花をすくふ筆の軸 同三〇

町はづれに花すこしある社かな 同

花の社頭むしろ圍ひの猿芝居 同

花の中に社淋しき鳥居かな 同三二

散る花を扇にうけてうたひけり 同

後園や落花の下に話しゐる 同

ふらここに二人のりけり花の中 明治三三

ほろくと心よき雨や花の酔 同

三味ひくや花に埋れて替女一人 同三五

山寺の寶物見るや花の雨 同

大江山花に戻るや小盗人 同

花の雨蒲團ぬらして誰が庵 同

公園や花を背中に居合抜 同三七

花晴れて語る鸚鵡や朱欄干 同三九

散る花に若くものもなきけしきかな、 同四一

北嵯峨や藪の中なる花の寺 同

花の山杉の中なる御寺かな 同

里内裏老木の花もほのめきぬ 同

御靈屋にいづこの花の吹雪かな 同

濡縁にいづくともなき落花かな 大正二

葉がぐれに尙散る花のありにけり 大正二

提灯に落花の風の見ゆるかな 同

花暮れて夜のまとゐとなりにけり 同

立枯れの老杉惜しめ花の山 同

眼に映る白き花あり酒の酔 同

人魚の如く月下の花に漂へり 同 三

けふの花に此満月を懸けにけり 同

見えつかくれつ花の梢の何鳥ぞ 同 一〇

彼處なる御寺も拜め花の雲 同

縁の落花一嵐して吹き去りし 同

谷杉へ吹きしづまりし落花かな 同

一片の遠くに遊ぶ落花かな 同

又こゝに花の雲あり松の間 昭和二

静かさや松に花ある龍安寺 同

竹藪を外<sup>ら</sup>れて花の嵐山 昭和二

啓書記の達磨暗しや花の雨 同

時計鳴るよべど留守なる花の寺 同

一片の落花見送る静かな 同

ちらくくと眼に映り来る峯落花 同三

咲き満ちてこぼるゝ花もなかりけり 同

貴船

思ひ川渡ればまたも花の雨 同

行人の落花の風を顧みし 同

下草に落ちじづまりし落花かな 同

離宮出て花の堤を下りけり 同四

傘さして皆仰ぎ居る雨の花 同

ひらくとつくもを縫ひて落花かな 同五

夢まじりこぼるゝ花の尙ありぬ 同

谷深く尙わたり居る落花かな 昭和五

鯉の水落花つゞりて静なり 同

袖の上に慌だしくも落花かな 同

もり上り花あるところお寺かな 同六

茶室ありはなにもむく背花と扁したり 同

花冷の參詣人も少かり 同

花の下黄昏れてゐる遍路かな 同

花ありて長き土塀や紀三井寺 同

散る花を踏んで立去り難きかな 同

花だより書くひまありて貴船かな 同

慌し花信到りて雨到る 同七

花の間淀も桂も見ゆるかな 同

花の雨降りこめられて謠かな 同

傘さして仰向いて見る雨の花 同

雨の花傘持ちかへて仰ぎ居り 昭和七

松あれば花の雲ある都かな 同

花に消え松に現れ雨の絲 同

渡殿につゞく御堂や花の山 同

ロケーション見て佇むや花の下 同

咲きみちて散りもはじめぬ花にあり 同

結縁むすは疑もなき花盛り 同

聲青畝ひとり離れて花下に笑む 同

落花のむ鯉はしやれもの鬣長し 同

花遅し昨日初雷今日餘寒 同 八

目つぶりてやり過ぎしけり花埃 同

石に腰縁起買ひ讀む花の下 同

燈臺を花の梢に見上げたり 同

鬢に手を花に御詠歌あげて居り 同

立ならぶテントの上の花の雲 昭和八

230

諸人の花に詣るや道成寺 同

あちこちの花のたよりや京の宿 同

こぼれ散る花をとどむるよしもなし 同

鴛鴦の並び現れ花のかけ 同九

白雲のほとおこり消ゆ花の雨 同

此谿の花に埋れて温泉宿かな 同

廢れ行く度會橋や花堤 同

岩倉の花の御寺の實相寺 同

花の旅重ねてこゝに嗟峨の花 同

花の雨惜しき障子をしめにけり 同

一ところ落花吹きまろぶところあり 同

この枝の殊に咲き満つ花の雨 同一〇

園丁の仕事見てをり花の蔭 同

231



もの静に花に情話やはゞからず 昭和一一

別莊を出て別莊へ花の坂 同 一二

相隣る門裏門や花の坂 同

ゑまひゐる人に幸あれ花の下 同

廣前に一面に敷く落花かな 同

水あれば即ち落花綴りをり 同

堂塔をめぐりて敷ける落花かな 同 一三

旅人の濡れつゝ行くや花の雨 同 一四

花の雲塔の半ばをかくしけり 同

見渡せばおしなめて花咲きそめし 同

花の下ちよと縁談に觸れてもみ 同 一五

たゝゝと綴りて落つる花の塵 同

花の雨濡れそぼちつゝ行く人等 同

池の面落花たゝみし一ところ 同

花散るや鈍な鴉の翅あたり 昭和一五

落花綴ぢひとかたまりに流れをり 同

忽ちに曇り来れば花の雨 同一六

一つ家の花に埋れて由ありげ 同

いと古きレストランあり花盛り 同

切石を敷いて坂あり花の寺 同

子を負ひて握飯食ふ花の山 同

東京は谷中の墓地も花多し 同

神域の心得讀むや花の下 同

神前に花あり帽をとり進む 同

教師まづ進み生徒等花の宮 同

經の聲和し高まりつ花の寺 同

喜壽の人の祝ひ

休みなく百歳までの花の坂 同

法鼓鳴り梵鐘響き花苔む 昭和一六

法要の終りし鉦や花の寺 同

雉子郎を悼む

散る花を悼む心も慌し 同

朝まだき落花の上の轍かな 同

大寺の境内に敷く落花かな 同

まろび来る落花多くは汚れたり 同

花ありて御廟所ありて静なり 同 一七

騷人にひたと閉して花の寺 同

一山の花に僧徒を集めたり 同

閉したる花の御寺は情なし 同

近き花ゆれ遠き花少し揺れ 同

虚子古稀祝賀ホトトギス同人會

今日こゝの花の盛りを記憶せよ 同 一八

山寺の和尚頑な花盛り

昭和一八

288

見るところ花はなけれどよき住居 同

けふは又花に妬みの風ありぬ 同

故舊皆花にちらばり少し老い 同

花咲かば堂塔埋れ盡すべし 同

花の寺末寺一念三千寺 同

ふるさとに花の山あり温泉あり 同

比叡遠く愛宕近しや花の里 同

擴聲機持ちて守衛は花に立つ 同

交番の巡查親切花の山 同

さしのべし子の手を曳いて花下に立つ 同

花冷や盃に酒二三杯 同

お役所も花の盛りや麴町 同

先の人もとの如くに花下に在り 同

ちらく／＼と杉の木の間落花かな 昭和一八

手にうけて開け見て落花なかりけり 同

玉の如まろぶ落花もありにけり 同

けふの花盛りと思ふ風雨かな 同一九

もてなしの心を花に語らしめ 同

参詣の人に俄な花の雨 同

わが耳を一木の花の囁きに 同

匂やかに日に突出でし花の枝 同

庇より覗き揺れゐる花の枝 同

辨天の花に参詣撥納め 同

懐古園花の萼を踏みて訪ふ 同二〇

櫻

順禮の笠に願ある櫻かな 明治二五

朝櫻一度に露をこぼしけり 同二六

ちる時を夕風さそふさくらかな 同二七

車どめ老木の櫻咲きにけり 明治二八

うたゝねをよび起されて櫻かな 同

木がくれて麓寺見ゆ遅櫻 同

田の中の社の櫻咲きにけり 同二九

曉の白粥うすき櫻かな 同

使して遅き山路の櫻かな 同三〇

金屏におしつけて生けし櫻かな 同

君謠ひ臣鼓うつ櫻かな 同

幕の内に箒吹き落す櫻かな 同

町中に櫻咲きたる社かな 同三二

野の寺や菜の花曇遅櫻 同三三

夜櫻や梅川樓を出る藝者 同三五

夜櫻や用ありげなる小提灯 同

夜櫻や紅提灯のもえて落つ 同

夜櫻や、墓者幫たい問この六歌仙 明治三五

夜櫻のくすぼる許り簞かな 同

いつまでも遅き櫻や郡山 同三八

上人を戀ひて詮なき櫻かな 同四一

この海の底に珠ある櫻かな 同

祇王寺を再建したる櫻かな 同

山ざくら故人に逢ひし思ひあり 昭和二三

山櫻映りもぞする鏡岩 同

山櫻すかして御堂幽かなり 同

街びとの寄附の櫻や御陵道 同三

貴船

遅櫻なほもたづねて奥の宮 同

白雲の過ぎ行く峰の櫻かな 同

山櫻葉の圃よりこぼれけり 同四

市の音響き來れど庭櫻 昭和四

修學院離宮二句

半蔀を上げてお茶屋や山櫻 同

今一つ中のお茶屋や山櫻 同

土佐阿波の國境、河戸といふところ

國境の橋の小さし山櫻 同 六

千三百尺の根引坂にかゝる

山櫻見下ろしつゝも登るかな 同

吉野川に沿ふて下る

山櫻又現れて來りけり 同

行手なる日の落ち方の山櫻 同

身をよせて西行櫻親しけれ 同

行く雲に西行櫻うち仰ぎ 同

見上げたる西行櫻見下ろしぬ 同



老松に櫻咲きたる舊家かな 昭和六

土佐日記懐にあり散る櫻 同

舟すゝむまゝに浦戸のさくらかな 同

今日も亦風の出でたる櫻かな 同七

杯盤を運べる庭の櫻かな 同

庭内に自動車の入る櫻かな 同

ことづてを神にして行く櫻かな 同

廣前のところぐに山ざくら 同

筋塀の上につき出し櫻かな 同

筋塀に添うて下向の櫻かな 同

砂が目に面白からぬ櫻かな 同

業平の墓にさしある櫻かな 同

御神輿の宮に還幸夕ざくら 同八

繪巻物にあるげの櫻咲いてをり 同

秀衡の櫻といふに憩ひけり 昭和八

山櫻咲きひろがりぬ松の間 同

白濱の牡丹櫻に名残あり 同

幕の紐結び垂らしぬ櫻の木 同九

故郷塚ひそかに櫻咲いてをり 同

濡縁に腰掛けて見る山櫻 同一〇

ちろくと燃ゆる煖爐や山櫻 同

庭に出て妻にも見よとゆふ櫻 同

人皆行く我こゝにあり山櫻 同

中堂よ大講堂よ山櫻 同

山裾のおどろの中の櫻かな 同一二

幹太く大いなるかな家櫻 同

樓上に四方の櫻の梢かな 同一三

行く春や牡丹櫻の今盛り 昭和一四

やゝ暑く八重の櫻の日蔭よし 同一五

八重櫻小公園の這入口 同

色濃ゆき遠山櫻見やりけり 同

獨り笑む山櫻あり人行かず 同

この宮の鳥居内外の山櫻 同一六

松の間の櫻は幽かなるがよし 同

咲き満ちて色香乏しや町櫻 同

日當りて電燈ともり町櫻 同

古き道あるにはありて夕櫻 同

松が枝にのり出し咲けり峰櫻 同一七

遠櫻折節人を點じ得し 同

木村小太郎追弔

山櫻たづねんすべもなかりけり 同

大寺をめぐりて牡丹櫻かな 昭和一七

暮れければ灯を向けぬ家櫻 同一八

謠會すゝむにつれて夕櫻 同

葉少しまじりて櫻尙白し 同

深川正一郎と共に清水東山子を訪ふ

櫻見て俳諧文庫談暫し 同

子は捜す母は櫻の木がくれに 同

手を舉げて走る女や山櫻 同一九

花見 朱雀門花見車のもどりけり 明治二八

園の戸に花見車の忍びよる 同二九

具足櫃に謠本あり花の陣 同三〇

大なる朱の盃や花の宴 同

花の下に夕日淋しき筵かな 同三三

山駕や酒手乞はれて櫻人 同三五

花見船菜の花見ゆるあたり迄

明治三五

櫻人乗りし竹屋のわたしかな

同

花衣脱ぎもかへずに芝居かな

同 三六

洛の灯をしたひかへりぬ櫻人

同 三九

花の戸に倒れかゝりぬ酔二人

同

太秦で提灯買ふや櫻狩

同

草の戸に終る花見の廻し文

同

山人の垣根づたひやさくら狩

同

左丹塗の文箱ゆきかふ花の幕

同 四一

古書一函かつぎ戻るや花の宿

同

八重あるが故に花見の日曜日

大正 二

料理屋は皆花人の下駄草履

同 三

ぬぎすてし花見衣のよごれ見よ

同 一〇

うたゝねのさめて日高し櫻人

昭和 二

花過ぎの茶店を守りて老婆かな 昭和二

花茶屋に隣りて假の交番所 同

花の茶屋過ぎて御堂に憩はゞや 同

花人をそれて松吹く龍安寺 同

花疲れ佇みやりし砂塵かな 同三

花人を見つゝ、筍藪にあり 同四

花人に行き逢ふ時の埃かな 同

花人の静かに動く闇の坂 同

花人に推され十三詣かな 同

漕ぎ亂す大堰の水や花見船 同

花の下二人三脚して遊ぶ 同六

花見舟唯見てをるや茶屋女 同七

花人に神の帳の垂れてあり 同

宴未だはじまらずして花疲れ 同

池水に映りて過ぐる櫻人 昭和七

花疲れ東寺の塀に沿ひ曲る 同八

向うなる花には別の茶店あり 同

對岸の花人は唯行く如し 同

三熊野の花の遅速を訪ねつゝ 同

青ざめてうつむいてをり花の酔 同

二代目の女あるじや花の宿 同九

水馴棹窓に現れ花見窓 同

ひそやかに花見辨當うちかこみ 同

花疲れ肱に疊を覚えつゝ 同

膨れ来る大石垣や花疲れ 同

草履ぬいで女坐れり花の土手 同

花に暮れにしん料理にはひりけり 同

配膳の今や終りし花静か 同

よき椅子にどかと落ちこみ花館 昭和一〇

賓客となりて一日や花館 同

旅荷物しまひ終りて花にひま 同

欠伸すぐ唄になりけり花の茶屋 同

いつまでもトラムプするや花の茶屋 同

花人に教會の鐘鳴りわたる 同二

ヴェエルダ！

箸で食ふ花の辨當來て見よや 同

キューガーデン吟行

<sup>あしなへ</sup>の妻を車に花に曳く 同

ヴォカンス邸即興

日本の花の提灯ともるもと 同

女將に代りて

花の如く月の如くにもてなさん 同二三



婢下僕走り出迎へ花の莊 昭和一二

肴屑俎にあり花の宿 同一三

鬱々と花暗く人病みにけり 同

此行に缺けし人あり花に病む 同

東にも俳諧料理花盛り 同一四

花の宿ならざるはなき都かな 同一五

病む子あり花にも一家樂しませ 同

人形のやうに塗りたる花の顔 同

新田丸招宴

五十四や花の食卓番號は 同

花の宿泊る用意もなくて來ぬ 同一六

我が宿の花に戻れば静なり 同

暫くは浪人暮し花の宿 同

花にゆく老の歩みの遅くとも 同

大いなる白きナフキン花の卓 昭和一六

花の酔蹠蹠として唯歩く 同

花の茶屋知りたる義理に立ち寄りぬ 同

行き當りく行く花の客 同一七

樓上に客たり花は主たり 同一九

山莊に客たり四方の花にあり 同

縁に腰やうやく花に落ちつきぬ 同

花 篝

城壁にもたれて花見疲れかな 同二〇

埒の外の人顔花の篝かな 明治三〇

一人の顔正面や花篝 大正一五

花篝衰へつゝも人出かな 昭和六

虚無僧の一ぶくするや花かゞり 同

吹きちぎる花の篝の焰かな 同

花篝祇園の社たゞ暗し 同

吸がらを突きさし去るや花篝 昭和七

花篝燃ゆるが上に浮ける花 同

まだ焚かぬ花の篝や夕間暮 同

久松伯奉告祭

花曇 能のある東雲様や花曇 明治二九

高臺に光る薨や花曇 大正五

夜に入れば月明かや花曇 同

水明かに落花浮べり花曇 同

花曇品川驛の人出かな 同 一二

番町や館々の花曇 同

橋上にとまりし汽車や花曇 昭和 一四

立ち出でゝ見れば我が家も花曇 同 一五

一陣の風に俄に花曇 同 一九

櫻鯛 砂の上曳ずり行くや櫻鯛 同 七

骨蒸しに揃へて百の櫻鯛 昭和一五

春の海 船の中に船くゞり入る春の海 明治二九

長江の濁りこゝまで春の海 昭和五

籐椅子のふちが映りぬ春の海 同八

下駄はいて這入つて行くや春の海 同

春の海 ランチ櫻は進み出づ 同一〇

灣あれば漁村あるなり春の海 同一四

春潮

春の海 入込みこゝを油壺 同一五

春の海 鯛と珠とが有りぬべし 同一六

春潮や海老はね上る岩の上 明治二八

音たてゝ春の潮の流れけり 同二九

龍神に酒うちそゝぐ春の潮 同三一

春潮や巖の上の家二軒 同

春潮や鮫の子多き波止の中 同

春の潮平目も烏賊も泳ぐなり 明治三五

御廟所や春の潮の音の上 大正八

春潮の小高く見ゆる草の果て 同一

春の潮先帝祭も近づきぬ 同

春潮といへば必ず門司を思ふ 昭和五

春潮の騒ぎて網を引くところ 同六

春潮のさゝやいてゐる枕許 同八

我心春潮にありいざ行かむ 同一

春潮や窓一杯のローリング 同

春潮の日々の機嫌や今日はよし 同

騒立てる春の潮に船乗りす 同

それくの礁に名あり春の潮 同一四

春潮のあをくとして船渠かな 同一八

春潮の如く激しく雄大に 同

年尾長女中子興健女子専門學校に入學の志望あり試験を受く

春潮にたとひ艦權は重くとも 昭和二〇

磯遊び 磯遊び二つの島のつゞきををり 同九

汐干 夕暮の汐干淋しやうつせ貝 明治二七

大船に女あつまる汐干かな 同

汐干船浮み上りて歸るなり 同三五

蛸ゑがく大きな旗や汐干船 同

大川を海に出でたる汐干船 同

大船は早も坐りて汐干かな 同

汐干船もの賣る船も交りけり 同

濱松の梢越しなる汐干狩 大正一一

汐干潟人現れて佇めり 同

親も子も汐干戻りの日焼して 同一三

汐干岩かくも續きぬ沖の方 同

沖船の動きそめけり汐干潟 大正一三

底泥に流るゝ水や汐干潟 同

家の間に汐干の岩の來りけり 昭和六

汐干潟汐の流に板の橋 同七

船煙かむりて行くや汐干船 同

顧みて人の少なき汐干かな 同

汐干潟人走りをる何やらん 同八

裏濱は家族許りの汐干潟 同

橋杭の岩といふあり汐干潟 同

岩の上を走る人ある汐干かな 同

長靴をはける女や汐干狩 同一四

昔こゝ六浦とよばれ汐干狩 同

うす曇りしておだやかや汐干潟 同

汐干潟洲は柔かに現れて 同

目印の赤いゆまきの汐干人 昭和一四

傾ける汐干の濱を踏まへ立つ 同 一七

蛤 蛤を搔く手にどゞと雄波かな 明治四一

舌やいて焼蛤と申すべき 昭和八

蛤の潮も吐かずに乾きをり 同 一六

蛤をさげで渚をゆき戻り 同

馬刀 馬刀突の子の上手なりたかり見る 同 七

櫻貝 櫻貝波にものいひ拾ひ居る 同 一三

砂も亦美しきかな 櫻貝 同 一五

壺焼 壺焼を運び來、島の名を教ゆ 同 一二

寄居蟲 やどかりや覺束なくもかくれ顔 明治三五

櫻草 異り種へるに任せぬ 櫻草 同 三九

櫻草の鉢またがねばならぬかな 昭和六

リチュプ 給仕女も胸に挿したるチュールリップ 同 一



ベルギーは山なき國やチューリップ 昭和一一

リプトンの紅茶の味やチューリップ 同一五

ヒヤシンス いたづらに葉を結びありヒヤシンス 同 五

巴里下宿

アネモネ アネモネは萎れ靴は打重ね 同 一一

灌佛 山寺の障子締めあり佛生會 同 一九

花御堂 花御堂の下に下足の夫婦かな 大正 九

花御堂を作りつゝある寺淋し 同

山寺や人も詣らぬ花御堂 昭和一八

甘茶 和尚云ふ甘茶貰ひにまた来たか 同 一〇

囀 や山かけて賣る土地廣し 大正 二

囀 や椿大樹の花の數 同 一〇

囀 の窓の大きなホテルかな 同 一一

囀 の高まる時の落椿 同 一三

囀の大樹の下の茶店かな 大正一三

囀の高まる時の静かさよ 同

囀の高まり終り静まりぬ 同

鳥の巢 大木や鳥の巢のせて藤かゝる 同 二

燕の巢 巢燕にわりなき柱時計かな 明治三〇

雀の巢 藁さがるけふは二筋雀の巢 昭和一八

孕鹿 孕鹿とぼく雨にぬれて行く 明治二七

神仙體

春の草 金冠に玉かしきゐる春の草 同 二九

垣根草芳しうして宿戀し 同 三八

芳しき小草もゆるや塔の下 同 三九

芳草や黒き鳥も濃紫 同

入屋出てふむ時草の芳しき 同

垣間見る好色者に草芳しき 同

春草にこぼれ落ちけり鹿の糞 昭和五

前足を折りて臥す鹿春の草 同

芳草に落ち添ひたりし椿かな 同六

春草をすべり下りたるあとありぬ 同

萬國旗引く杭を打つ春の草 同

春草を踏めば起き上り 同

萌え立ちし筧の下の春の草 同七

つゝかけし草履の下の春の草 同

春草や梯子かけある杭二本 同

春草に脱ぎし草履の重なりぬ 同八

春草をひたして赭き出水かな 同二

倫敦の春草を踏む我が草履 同

緑竹の下やそゞろに青む草 同四

春草や急ぐでもなく馬うたせ 同

春草のこの道何かなつかしく 昭和一四

春草は藪の中にも青々と 同

春草に青きペンキをこぼしつゝ 同

春草を踏めばくぼみて蝶たちぬ 同一五

春草の小高くなりてそこに幹 同

濱砂に儂き春の小草かな 同

春草のありぬちよぼくちよぼくと 同一六

春草を踏み越えく鳩あるく 同

春草や岩の上なる土少し 同

春草の築地の土に縫りたる 同一七

泥上げてある春草は起きんとす 同一八

春草に手帳落せしまゝにあり 同

春草を踏まへて鳩の足あかし 同一九

若草

若草や八瀬の山家は小雨降る

明治二五

古草

古草や昔男の垣根草

昭和一六

薬

古草も妹が垣根に芳しや

同

大木の薬したるうつろかな

同七

竹の秋

村塾やすでに蚊の出る竹の秋

明治三五

竹の秋大百姓の構かな

昭和八

こゝにある離宮裏門竹の秋

同 一八

十三詣

石段を上り下りの智恵詣

同 四

梅若忌

語り傳へ謠ひ傳へて梅若忌

同 一三

忌日あり碑あり梅若物語

同

春光

春來れば路傍の石も光あり

同 一五

川蒸気それにも春の光あり

同

旗竿に流る春光學校旗

同 一七

風光る

装束をつけて端居や風光る

明治三六

青麥

青麥の畑こまぐと灣の奥

大正一一

菜の花

菜の花や蝶むれ渡る大井川

明治二七

仁和寺

菜の花にねり堀長き御寺かな  
同二九

菜の花や化されてゐる女の子  
同

菜の花や村より村へものもらひ  
同三二

菜の花や暮れなんとして酒屋まで  
同

叡山を下るや花菜見えそむる  
同三七

菜の花に追ひ出す子あり野路の家  
同四〇

菜の花に光る時あり城の鯨  
昭和七

菜の花に隣村より弱法師  
同一四

菜の花や京街道のこゝが好き  
同二六

花菜漬

上<sub>ミ</sub>京の花菜漬屋に嫁入し  
同二五

大根の花

大根の花紫もうつろひぬ  
明治二八

大根の花紫野大徳寺  
同二九

豆の花

道中は明日の廓や花大根 明治三五

浅間晴れて豌豆の花真白なり 同二七

豌豆の花に降る雨の籠かごさかな 大正三

蠶豆の花は早やなし黒き滓 同一〇

鹿かの峰ねの紺屋なほあり豆の花 昭和二

蝶

蝶ひらく仁王の面の夕日かな 明治二七

蝶ひらく五條の夕日かな 同

蝶々の草にかくるゝ夕日かな 同二九

古園に蝶々多く蛾多し 同三〇

葎うてば蝶々とぶや五六匹 同

かたまつて蝶々飛ぶや幕の上 同

蝶々のもの食ふ音の静かさよ 同

祭壇に蝶々飛ぶや草の中 同

蝶たつや草の上する幕の裾 同三三

蝶 たつやボールたづぬる草の中 明治三三

蝶々のとまりてしなふ草や何 同三九

花ののち木の間に白き蝶々かな 同

雨の日は樓門にとぶ胡蝶かな 同

堇より濃紫なる胡蝶かな 同

園深し雀を逃げて人に蝶 大正三

草の上に蝶を打ちたる書籍赤 同七

愁人の目に末枯や蝶の原 同

日もすがら蝶飛び消ゆる水の春 同八

蝶とまりて草のしなへば飛びにけり 同

蝶を見る目平らかや水の上 同

戸袋に静かにとまる蝶を見し 同

頭重く野に出て蝶を見る日かな 同一五

日輪を飛び隠したる蝶々かな 同



泥船に何をすさめて胡蝶かな 大正一五

渡し舟著きて蝶とぶ河原かな 昭和四

吹き落し風の蝶々のとまり居り 同

蝶の羽に風吹きつけて撓み居り 同

宇治川をわたりおほせし胡蝶かな 同五

蝶々の皆沈みをり風の園 同六

岩の間に人かくれ蝶現るゝ 同

蝶々の薊のとげを踏まへたり 同七

蝶々の高く上るは潦 同

後架の戸あくれば出づる山の蝶 同

初蝶の眞新しくも黄色かな 同一〇

線香の煙にあそぶ蝶々かな 同

馬耳塞出帆

ハンカチの蝶と細りて尙振れる 同一一

蝶の舌曲り入りたる花の蕊 昭和一二

園廣し蝶々も飛び疲るらん 同一三

揚羽蝶こゝにもそこにも現れし 同

初蝶を夢の如くに見失ふ 同一四

黒蝶のどこかに紅のありけらし 同

黄な蝶のつういと飛べば目路も黄に 同

蝶もとびふるさと人もたもとほり 同一五

皿匙の相打つ音や蝶の晝 同一六

誇りがに初蝶の飛び現れし 同一七

拓きたる畑の上に蝶々かな 同

たんぼゝをたんぼゝに飛ぶ蝶々黄 同

姪多川澄子の一子弘一郎(仙城)結婚

汝が母の爲め汝が爲めに花に蝶 同

園廣く蝶曇りともいふべかり 同

黒蝶のどひ越えく躑躅かな 昭和一七

初蝶の紫なりし今年かな 同一八

蝶を見る目はうつろなり書に淫す 同

一蝶の舞ひ現れて雨あがる 同

粉蝶の飛び現れて狂ほしき 同

障子開け中の暗さや蝶の晝 同一九

蝶の影人の面に草の上に 同

春風

山國の蝶を荒しと思はずや 同二〇

錦織る絲のもつれや春の風 明治二八

樓を下りて舟に乗るなり春の風 同三一

春風や馬を乗せたる貢船 同

三條の橋の埃や春の風 同四一

春風や枯れてかぼそき櫛原 大正二

春風や闘志いだきて丘に立つ 同

ひろくと丘の道なり春の風 大正二一

春風や椿の花の皆動く 昭和三

春風の吹くといふにはあらねども 同四

春風の築地の土のこぼれつゝ 同

春風の吹きわたりたるくぬぎ原 同

春風や少し亂れし木賊叢 同六

堤防に出て堤防や春の風 同七

飛べる蟲とりて雀の春の風 同

春風や鳩地を離れ羽ばたけり 同八

ころびたる子に鳩のたつ春の風 同一〇

椿先づ揺れて見せたる春の風 同

サンスーシーの宮殿

春風や柱像屋根を支へたる 同一一

ポツダムに春風吹いて人出かな 同

春風に吹きなびく旗皺すこし 昭和一四

親のそば離れたがる子春の風 同一六

春風の吹き捲く埃いそぎ掃く 同一八

春風に一つ時曇る硝子かな 同

春風の人の歩みのさま／＼に 同

春風や離れの縁の小座布團 同一九

我が作る田はこれ／＼と春の風 同二〇

風 道芝やたぐりためたる紙鳶の絲 明治三一

風籬の中より上りけり 同

風の尾の地を離れつゝのぼりけり 同

紙鳶ねだる兒を凝視しぬ心空し 大正六

風強き森の中紙鳶を提げて行く 同

紙鳶繫ぐ杭せに草の吹きたわむ 同七

敵ながら雄々しき紙鳶の上りけり 昭和二

夕空にぐんぐん上る風のあり 昭和八

屋の棟に沈みては又上る風 同一二

風の空ぺかく風も現れし 同

風高し晝の月よりや低し 同

白雲の棚曳く上の風の空 同

婢に紙鳶を揚げさせておき子は遊ぶ 同一二

絲のばす時紙鳶の尾の大だるみ 同一四

風車

孫つれて老の手に紙鳶さげ戻る 同一五

さし上げていよくまはる風車 同八

皆廻る中にまはらぬ風車 同

さし上げて春風にあり風車 同一五

廻らぬは魂ぬけし風車 同

風船

風船の子の手離れて松の上 同九

石鹼玉

向き合ひて互に吹くや石鹼玉 同八

石 鹼 玉 底 に 當 り 梅 に は ね  
昭和 八

櫛 子 より 飛 ん で 出 で け り 石 鹼 玉  
同

鞦 韆

鞦 韆 や 障 子 あ い て 人 あ り や な し  
大 正 七

鞦 韆 に 抱 き 乗 せ て 沓 に 接 吻 す  
同

鞦 韆 の も と 春 草 の 絶 え ぐ に  
昭 和 七

人 居 ら ぬ 鞦 韆 に 來 つ 園 の 月  
同

鞦 韆 に 一 人 遊 び て あ か ぬ 子 よ  
同 八

ボ ー ト  
レ ー ス

鞦 韆 に 乗 る 子 乗 ら ぬ 子 遊 び を り  
同 九

夕 日 影 競 漕 赤 の 勝 と か や  
大 正 一 三

競 漕 の す み た る 川 の 荷 船 か な  
同

遠 足

遠 足 の 野 路 の 子 供 の 列 途 切 れ  
昭 和 一 三

遠 足 も 今 は 駈 足 池 の 端  
同 一 七

小 弓 引

小 弓 引 勘 解 由 次 官 の 男 振 り  
明 治 三 二

小 弓 引 的 を 櫻 に う つ し け り  
同

うつくしき額の汗や小弓引  
明治三二

遍路  
門川に足洗ひをる遍路かな  
昭和六

山端を現れ来る遍路かな  
同

土管をば煙出しとす遍路宿  
同

お遍路をかくして過ぎし埃かな  
同

遍路の子五形花摘んで後れをり  
同

道のべに阿波の遍路の墓あはれ  
同一〇

朝寝  
音もなき老の朝寝の氣がかりな  
同

うかゞひし老の朝寝の一と間かな  
同一五

なとがめそ子供がなくて朝寝妻  
同一六

朝寝人ひたと閉まりし襖かな  
同

美しき眉をひそめて朝寝かな  
同一七



時化らしく尙も朝寝をつゞけけり 昭和一七

法外の朝寝もするやよくも降る 同一八

客となり離れに朝寝ほしいまゝ 同二〇

春眠

春眠のケルンの寺の鐘が鳴る 同一一

春眠の一句はぐくみつゝありぬ 同一五

春眠を起すすべなく見まもれり 同

春眠の聞の掛金五十年 同

春眠や鬢鬚として白きもの 同

春眠の一ゑまひして美しき 同

金の輪の春の眠りにはひりけり 同一七

春眠や忍び寄りたるものゝ音 同一九

春眠のほしいまゝなる一と間かな 同

春愁

春愁や冷えたる足を打ち重ね 同一八

蠅生る

病人に生れし蠅のとびにけり 大正五

横柱に生れてとまる蠅ならん 大正五

鏡臺に生れし蠅の居りにけり 昭和四

春の蠅 病人と共に年越し春の蠅 大正五

冴え返り又居ずなりぬ春の蠅 同

春の蠅飛んで話の纏らず 昭和一七

春の蚊 春の蚊のゐておどましや亭を去る 同一六

虻 植ゑかへし菊に水やれば虻来る 明治三一

虻落ちてもがけば丁字香るなり 昭和四

花屑をはみこぼしつゝ藤の虻 同五

黒虻の尻の黄色が逆立ちぬ 同一四

蜂 巢の中に蜂のかぶとの動く見ゆ 同二

うなり落つ蜂や大地を怒り這ふ 同

つと刺しぬ風に吹かれて來し蜂が 同六

熊蜂のうなり飛び去る棒のごと 同一二

雀の子

見廻して顧みもして親雀

昭和一七

子猫

緞通に腹匍ひ歩む仔猫かな 同 一〇

主婦の頬に子猫の爪の痕のあり 同 一一

拾ひたるよりの仔猫の物語 同 一八

寵愛の仔猫の鈴の鳴り通し 同

スリッパを越えかねてゐる仔猫かな 同

人丸忌

山邊の赤人が好き人丸忌 同 一六

神と齋く卑官なりける歌人を 同

鞍馬二句

花供養

午の鐘響き渡るや花供養 同 三

ひれ伏して拜む女や花供養 同

御身拭

この村の人は牛なりお身拭 明治三二

食うて寝て牛になりけり御身拭 同

嵯峨は花お身拭あり清涼寺 同

御忌 西山によき日沈みぬ御忌詣 大正一〇

群集する人を木の間に御忌の寺 同

御忌詣群集の老に春寒し 同

霾 この頃は霾ると聞く心せよ 昭和一七

壬生念佛 壬生念佛本願寺にも詣りけり 明治三二

物賣りの翁の鬻や壬生念佛 同

仁和寺の塔霞みけり壬生念佛 同

かくれすむ都の西や壬生念佛 同三五

佛法を踊つて見せつ壬生念佛 同三七

西山に所々の花見ゆ壬生念佛 同

舞臺暫し空しくありぬ壬生念佛 大正三

島原太夫道中 太夫待つ棧敷の群集おとなしき 昭和三

太夫見の向ひ棧敷の見知り人 同

鮎膾 船人の近江言葉よ鮎膾 明治三八

山吹

そぼふるや山吹を折る船乍ら

明治二七

山吹を縄もてゆるくしばりたる

同三〇

山吹に土黒き鍛冶が小庭かな

同

山吹や峠の茶屋の裏の井戸

同

山吹や暮春のまとゐ散り歩く

同三九

山吹に焜爐煽げば散る火かな

同

山吹や川瀬の所々に洗ひ馬

同

山吹や人に怖ぢざる溪の魚

大正二

山吹に降りゐし雨でありにけり

同

山吹や橋本茶屋に小留別

同四

橋高デして山吹の谿深し

同

山吹に裏戸あきたり人未だ

同

山吹に水狭うして深きかな

同

山吹に六月の能の話かな

同

山吹の雨や双親堂にあり 大正六

372

山吹に來り去りし鳥や青かつし 同七

山吹や泥の上なる水一重 同九

山吹やひねもす開かぬ縁障子 同二三

山吹の花のさ搖れや雨の中 昭和三

山吹の川に漬けある生簀かな 同

川波に山吹映り澄まんとす 同六

兩岸の山吹の花つゞきけり 同七

折り持てる山吹風にしなひをり 同

山仕事山吹がくれして居りぬ 同

山吹のあらはれ來る庭廣し 同

山吹にかくれ馬酔木にあらはれぬ 同

川波に岸の山吹搖れなびき 同九

宇治川の岸の山吹風立ちぬ 同二〇

373

山吹に片戸あけあり枝折門 昭和一五

山吹の雨暗くなり面白き 同

十人餘り山吹の庵に居流れて 同

山吹や風に煽ちて枝折門 同一六

山吹に少し疲れしかと思ふ 同一八

もの蔭に八重山吹の黄のにじむ 同一九

### 海棠

海棠の枝球を編む大樹かな 大正二

海棠を見て賽しけり妙本寺 昭和七

他にもあり雨の海棠訪ふ人は 同一六

### 馬酔木の花

石橋へ馬酔木の花の徑下りて 大正二一

即景十句馬酔木の花を見て立てり 同

鹿のゐる馬酔木の奈良に來りけり 昭和四

花馬酔木春日の巫女の袖ふれぬ 同五

板塀の高き庭なり花馬酔木 同七

春日野の馬酔木の花は尙盛り 昭和七

馬酔木折つて髪に翳せば昔めき 同一二

ライラ  
ツク

瓶に挿すリラの花あり夜の宴 同一一

夜話遂に句會となりぬリラの花 同

折からの夜宴の花やライラツク 同

岩倉公遺跡

小米花

四疊半三間の幽居や小米花 同九

松の花

御陵に松の花粉の雲起る 同三

幾度か松の花粉の縁を拭く 同一九

木苺の花

木苺の花をあはれと眺めゐる 同六

杉菜

小川二つ竝び流るゝ杉菜かな 明治三七

種俵

春水をせきとめありぬ種俵 昭和四

水深く縮まつて見ゆ種俵 同一七

種俵つゝき遊べる小魚かな 同



種蒔

種囊縁に並べて蒔きにけり

大正五

手をこぼれて土に達するまでの種

同七

くさぐさの種蒔く事を樂しみに

同二

種子函に降り來し雨を仰ぎけり

昭和四

朝顔蒔く

朝顔を蒔く事につけ我世かな

大正三

生えずともよき朝顔を蒔きにけり

昭和八

苺植ゑ朝顔まきて庭狭ばめ

同一五

八十八夜

霜害を恐れ八十八夜待つ

同一六

春の霜

春霜や山の日蔭の路細々

大正九

別れ霜

二三本葱の坊主や別れ霜

明治三一

別れ霜ありしと聞くや牡丹の芽

昭和一八

茶摘

むかうむいて茶摘女の歌ひけり

明治二八

茶摘女を三人入れし茶園かな

同三七

大井川流れ茶山は重なれり

昭和一四

蠶

宿借さぬ蠶の村や行きすぎし 明治三一

桑をやるは眠りおくれし蠶かな 同

逡巡として繭ごもらざる蠶かな 同

流れざる蠶あはれむ裏の川 同

蠶飼ふ麓の村や托鉢す 同

美しき人や蠶飼の玉櫛 同三四

末摘の宿に飼ふたる蠶かな 同三七

人影の立ち塞がりし蠶窓の灯 大正一二

蠶屋暗し端近く來し人見ゆる 昭和六

傾きし蠶屋に突立つ蠶棚かな 同

屋根低き二階にもある蠶棚かな 同

門内の庭の廣さや蠶飼宿 同 一六

年々に櫛の太る飼家かな 同 一七

桑摘

桑摘むや妙義の雨の落ぬ間に 明治三九

青淵に桑摘の娘の映り居り 大正一四

桑 諏訪近し桑の山畑ところぐ 明治二七

雨の日をぬれざる桑の乏しけれ 同三一

繩ぼこり立ちて消えつゝ桑ほどく 昭和七

横山も切り開かれて桑畑 同八

蛙塗 蛙を塗る鍬の光をかへしつゝ 同二二

蛙塗るや首をかしげて懇に 同

残花 一片の残んの花の散るを見る 同二六

春闌 春闌暑しといふは勿體なし 同二三

夏近し 夏近し葱に水をやりしより 明治三二

夏近く葉廣しそめし街樹かな 大正七

蛙 島原や廓の裏に鳴く蛙 明治二七

あなかまの屋根にだに啼く蛙かな 同二九

山吹に甚だ多き蛙かな 同三〇

山吹や喉がふくれてなく蛙 明治三一

雨戸たてゝ遠くなりたる蛙かな 同

草の戸に艶書合せやなく蛙 同三九

草に置いて提灯ともす蛙かな 同

漕出でゝ蛙聞えずなりにけり 同

晝蛙一つ啼いて他未だ應へず 大正七

山下りて人なつかしや夕蛙 同一二

里人の灯ともさで来る蛙かな 同一五

だんくゝと行く田の蛙聞え来る 昭和五

五形花田のうちかへされて蛙啼く 同

蛙田に突出じてをる中二階 同八

喧騒の蛙の聲の中に讀む 同 一五

躑躅

裏山の紫つゝじ色薄し 明治二七

馬ほくく下り来る坂の躑躅かな 同三五